

消化器・肝臓センター



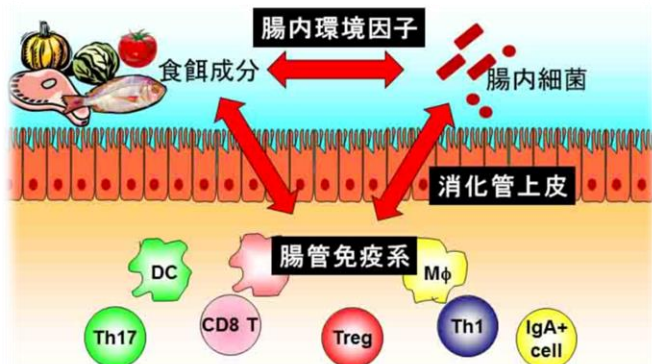
NEW一す NO.21



2017.3

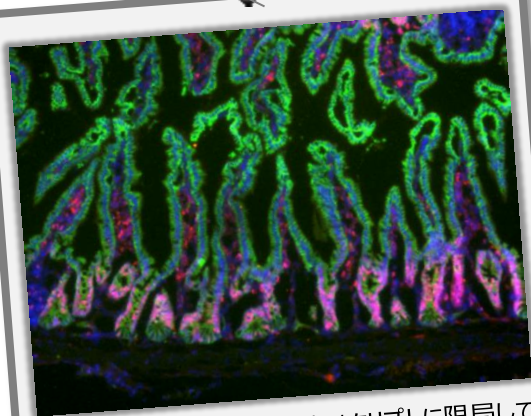
腸管免疫から見た消化器疾患

腸管の内壁は無数の絨毛で覆われておりその表面積はテニスコート1面分にも達します。腹腔内臓器であります口や肛門を介して外界と接している事から“内なる外”と言われ、常に細菌や食餌抗原に暴露されています。



(大阪大学免疫制御学教室ホームページより引用)

腸管免疫系は大きく分けて①免疫担当細胞、②腸内細菌と栄養素、③腸管上皮細胞の3つのバランスの上に成り立っています。有害な細菌やウイルスに対しては免疫応答により身を守り、一方で無害な細菌や食餌抗原に対しては過剰応答を抑えています。しかしバランスが崩壊すると腸管上皮のバリア機構が破綻し、免疫担当細胞がシグナルに上手く応答できず有害な細菌の体内への侵入を防ぎきれず様々な疾患の原因となる事がわかっています。代表的な疾患として癌、炎症性腸疾患に代表される様々な自己免疫疾患、アレルギー、感染症、高脂血症、動脈硬化、肥満、自閉症などが挙げられます。近い将来、腸管免疫研究から導かれた疾患側面に対する治療が大きなトピックになっていくと思います。



正常腸管上皮の増殖細胞はクリプトに局限している (緑: EpCAM, 赤: Ki-67, 青: Dapi)

当院消化器・肝臓センターではマクロだけでなくミクロを意識しながら疾患に対する専門的治療を幅広く実践しております。何かお困りの際はお気軽に当センターへご相談ください。

外科 荻野崇之



市立貝塚病院
TEL : 072-422-5865